

「優等学位基準提示(Honours degree benchmark statements)」の抄訳（加藤 光也）

○ 英語・英文学(English) (2007, 2000 年版の改訂)

序文

学科別基準提示は、アカデミックな共同体に、特定の学科あるいは学科領域におけるプログラムの性格と特徴を記述する手段を提供するものである。この基準はまた、ある一定のレベルにおいて、資格取得者が示さなければならない特性や能力との関連において、資格授与(the awards of qualifications)の標準についての、一般的な期待を表すものである。

この学科別基準提示は「優等学士学位」(bachelor's degree with honours)に適用されるものである。

「障害者均等義務」(Disability Equality Duty)が 2006 年 12 月 4 日から発効した。「障害者均等義務」は高等教育機関を含め、公的機関が障害者均等の問題に積極的に取り組むよう求めている。

前書き

……しかしながら、われわれは、この分野の性格において、取り扱うべき一つの発展を確認した。創作や、想像的文章作成、書き換えの要素を含むプログラムの数の驚くべき増加を認める必要があるからである。……

1 定義原則

1.1 英語・英文学(English)は文学および言語の厳格かつ批判的研究(critical study)によって特徴づけられる多様な学問分野である。英語・英文学が扱うのは、文学および文学以外の書かれたテキストの生産、受容、解釈であり、英語という言語の性格、歴史、潜在力である。英語・英文学の研究は、精神の柔軟に反応する開放性、議論における概念の洗練、過去と現在の文化や様々な価値との対話に参与する能力を促進する。この学科はまた、一般の共同体において、過去の文学および他のさまざまな文化形式についての、絶えず更新される知識と批判的認識を保持する上で、特別な役割を果たす。

1.2 英語・英文学 のコースで教えられる批判的読解(critical reading)や文章作成のさまざまな方法において考慮されるべきなのは、テキストの形式、構造、レトリックのほか、テキストが社会から産み出されること、テキストが諸文化の一部であり、諸文化の中で干渉すること、テキストが他の学科領域と共有する観念や素材を扱うことである。学生は文学テキスト相互の関係を学ぶほか、文学や他のメディア、およびその他の形式による芸術・文化の生産物、これら相互の関係を考察することもできる。学生の中には、このような理解のための適切な基礎を(実践に固有の技能と共に)創作(creative writing)を通じて獲得する者もいる。英語という言語の研究[対象]には、話されたり、書き記されたり、それらが混在したりする多様なコミュニケーション様式と、それらの様式に際立つレベルの音韻、文法、語彙、意味論、語用論が含まれる。英語・英文学の卒業生のすべては、意味の形成に、歴史、社会、政治、様式(stylistic)、民族、ジェンダー、地理、およびそのほかのコンテキストが影響を与えることを意識するものと期待される。

1.3 英語・英文学 および同族学科目(cognate subjects)における学部学生への教育がなすべきことは、

- ・(1) 広範で多様な読書を促進すること。
- ・(2) 学生が独力で批判的思考、批判的判断(critical thinking and judgement)をおこなえるよう促進すること。
- ・(3) 複雑で洗練された文学および文学以外のテキストや言説(discourse)の、読解、分析、あるいはまた生産に、学生を想像的に関与させること。
- ・(4) 広範でバランスの取れたカリキュラムを提供すること。
- ・(5) 学生が、言語の様々な表出力(the expressive resources of language)を理解し、認識し、利用

することを補助すること。

- ・(6) 学生が読解や文章作成行為を問題的にとらえることで、歴史の中、および彼らの実践の中で、テキストの生産および受容を批判的に省察できるようにすること。
- ・(7) 学生に、文学テキストと文学以外のテキストおよびさまざまな言説の生産と受容に対する、コンテキストによる捉え方(contextual approaches)の知識と認識を提供すること。
- ・(8) 言語による創造(verbal creativity)の理解と実践、および文学テキストの形式的、審美的次元の理解と実践の促進。
- ・(9) 学部卒業後の雇用に有用な、高度な概念力や、分析力、コミュニケーション技能を含めて、学科固有の技能と応用可能な技能(transferable skills)の範囲を広げること。
- ・(10) 英語・英文学 という明確な枠組みの中で学習研究することの、知的な刺激と満足に充ちた経験を提供すること。
- ・(11) 英語・英文学 に対する熱意と、英語・英文学 が社会的、文化的に持続的な重要性をもっていることに対する認識を、促進すること。
- ・(12) 英語・英文学 や関連する分野のさらなる研究のための基礎と、あらゆるレベルにおける英語・英文学 の教師のための基礎を提供すること。

1.4 高等教育(HE: higher education)における 英語・英文学 分野は、教育方法と知的な力点の置き方の多様性によって特徴づけられる。この学科のための意味ある学科基準提示は、実践された場合に英語・英文学が内在的にもっている豊かさを認め、その健全な発展が持続するための機会を創りだそうとするものである。したがって、学科別基準提示の第一の課題は、規制するための(regulatory)枠組みを特定したり、何かを規定(prescribe)したりすることではなく、英語・英文学 の学位取得プログラムのための基礎を提供し、新たな展開に順応し、それを促進することができる原理を表明することにある。

2 英語・英文学の性格と範囲

2.1 高等教育における 英語・英文学 はその知的性格と学問的实践においてたえず発展しつつある分野である。英語・英文学 が立証するのは、自らの歴史、位置、実践に対する洗練された問いかけを促進するような、批判的自己意識(a critical self-awareness)である。英語・英文学 には英語圏世界からの文学が含まれる。文学と言語の研究に加えて、この学科には比較文学、翻訳された文学、演劇、創作、映画、および文学以外のテキストの研究が含まれる。

2.2 英語・英文学 の範囲は広いので、何かを規定するためのいかなる試みも避けなければならない。例えば、ある学位取得プログラムは英語と英文学のバランスをとろうとするだろうが、もっぱら、あるいは全面的に文学に基礎をおくプログラム、もっぱら言語に基礎をおくプログラムもあり得るだろう。さらに、文化史や、映画のような文字以外のメディア(non-literary media)の研究を主要な構成要素とするプログラムもあるだろう。また多くの学位取得プログラムにおいては、入門以上の(beyond initial stages)ある程度の専門化も含まれるだろう。しかしながら、[それらのあいだには]知識と技能の共通領域があり、学生は選択したいいかなる専攻分野をも、当該学問分野(英語・英文学)のより広範な理解の中に位置づけることができるべきだと了解されている。

2.3 最初の学科基準提示発表[2000年]のあとに見られる、創作(creative writing)のコースや、授業群(strands)、学習単位(modules)の著しい増加は、英語・英文学 およびその関連学科の活力を示すみごとな実例となっている。今回の改訂は、創作の豊かな可能性(fertility)と、創作が英語・英文学の研究と密接で生産的な関係をもっていることの認識の上に立っている。創作は、自己批判的実践の促進に加えて、学生が、[英語・英文学研究と]同様の適性、知識、技能を、ただし、ある程度は別のルートを通じて、獲得することを可能にする。創作は言語文化に対する鍛錬された関与の仕方(数ある中の)一形態である。その具体的な成果は、散文や韻文や戯曲による想像力による独創的作品の生産という形をとることもあれば、また、創造的書き換え(creative rewriting)や既存テキストの翻案(adaptation)という形をとることもある。創作に携わる学生が産み出す独創的作品は、既存の文学の広範かつ批判的な読解によって形成されるし、ジャンルや形式や聴衆に対

する精確な顧慮を示すことにもなるだろう。個々の学習単位(modules)は特定のジャンルを対象とするもので、(例えば、単一学位、共同学位(joint honours)や複合学位(combined honours)プログラムの中での)一貫した授業群があるかもしれないが、学生は通常、様々なジャンルや様式に親しみ、それを実践する機会を与えられるべきである。

2.4 この分野は、その対応力、知的範囲、方法の多様性によって、ほかの学科の知識や手続き(procedures)に対して開かれている。英語・英文学 は学際的で、多分野にわたる(multidisciplinary)視野を奨励する。多分野にわたる作業は、形式的な関係がほとんど、あるいはまったくない二つか三つの分野の平行した研究からなる。学際的研究は、例えば一つのテーマの異なった視野からの探求(例えばジェンダーの表象)、特定の話題や時代、地域についての共同研究(例えばルネサンス研究)、あるいはつなぎのコースを用意した上での、同族分野(cognate disciplines)の共同研究(例えば 英語・英文学 と哲学)を通じての、複数の学科領域のより積極的な統合を求めるものである。

2.5 おおよその数値として、単一の 英語・英文学 学位プログラムは毎年、ほぼ 8,500 人の学生を受け入れている。ほぼ同じ数の学生が、複合学位や共同学位プログラムの一部として 英語・英文学 を選んでおり、英語・英文学 は人文科学のほとんどの学習単位構成(modular schemes)の中で中心科目となっている。英語・英文学 とほかの分野との知的親和性は、このような学生構成にも反映されている。複合学位や共同学位を目指す学生が、コースや学習単位のレベルで、単一学位を目指す学生と別に教えられたり評価されることはめったにない。したがって、この学科基準提示は学位取得プログラムの一部として 英語・英文学 コースのかなりの部分を履修する全ての学生にあてはまる。

2.6 英語・英文学 は生涯学習の理想を促進する上で重要な役割を果たす。初めて学科目として受け入れられて以降、英語・英文学は高等教育の主流においては社会人学生(mature students)を強く惹きつけてきたし、現在も惹きつけ続けている。英語・英文学はまた短期コースや継続教育プログラムにおいて広く教えられている。上級レベルのリテラシーが与えてくれる自信と自尊心のおかげで、英語・英文学は高等教育における社会人学生やそのほかの新型の学生には人気の高い、資格取得(empowering)科目となっている。

3 学科で得られる知識と技能

3.1 英語・英文学 は、特有の配置をもった様々なタイプの学位取得プログラムを受け入れている(incorporates)。学科固有の知識のどの側面を強調するかは、教育機関ごとに、またプログラムごとに違っているだろうが、学位の重要な一要素として英語・英文学を学んだ修了生は以下のことを示せるようになることが適当である。

- ・(1) 英語・英文学の知識。英文学の知識の場合には、文学史上の様々な時代のかなりの数に上る作家とテキストを含む。単一の学位取得を目指す英文学専攻の学生にとって、その知識は、1800 年以前からの書き物(writing)についての知識を含むものとする。単一の学位取得を目指す英語学専攻の学生にとっては、英語という言葉の歴史とその展開についての広範な知識を含むものとする。
- ・(2) フィクション、詩、ドラマといった主要な文学ジャンルで書かれたテキストの特徴、および、その他の種類の書き物やコミュニケーションの特徴についての知識と理解。
- ・(3) 英文学の範囲と、英語の地域的および世界的な形態の経験。
- ・(4) 英語という言葉の構造、レベル、言説機能(discourse functions)に関する知識。
- ・(5) 文学創造における想像力の認識。
- ・(6) 文学史を形成する批評の伝統の役割の意識。
- ・(7) 文学が書かれ読まれる際の、言語的、文学的、文化的、社会・歴史的コンテキストの知識。
- ・(8) 文学と、適当な場合には映画やその他の文化的生産物を含む、そのほかのメディアとの関係についての知識。
- ・(9) 有用で精確な批評用語の知識、および、適当な場合には言語学や分多論の擁護の知識。

- ・(10) 文学研究方法の範囲と多様性の意識。そこには、創作の実践、パフォーマンス、批評理論、言語理論における広範な専門性も含まれるだろう。
- ・(11) 文学と言語が文化の変化と違いを産み出し、また反映することへの意識。
- ・(12) この分野の多面的性格の認識と、この分野が他の分野および形式の知識と複雑な関係をもっていることの意識。

学科固有の技能

3.2 学位取得の重要な要素として英語・英文学を学んだ者は、付随的に一定程度の文学、語学、批評の技能を身につけることになる。個々の学位取得プログラムは、特定の能力や技能を発展させる上で、どこに力点を置くか選択することになる。以下に挙げる学科固有の技能は、個々のプログラムの成果を示すための広い枠組みを提示するものである。

- ・(1) 精密な読解、記述、分析の批評的スキル、あるいはテキストや言説の生産。
- ・(2) テキストの知識と理解、英語・英文学研究に関連する概念や理論を、発言(articulate)する能力。
- ・(3) [文学上の]一般的約束事に対する敏感さと、状況や、著作権や、テキスト生産、想定された聴衆がコミュニケーションに与える効果についての敏感さ。
- ・(4) 意味生産において言語が中心的役割を果たすことへの反応(responsiveness)と、言語が感情を動かす力に対する敏感さ。
- ・(5) 口頭および書かれたことばによる、効果的コミュニケーションや議論のためのレトリックの技能。
- ・(6) 広範な語彙と、適当な批評用語の使用能力(command)。
- ・(7) この分野に適当な文献学的スキル。これには、学問業績の発表の際の、出典の正確な引用と、一貫したコンヴェンションの利用が含まれる。
- ・(8) 異なった社会的および文化的コンテキストが言語の性格と意味にどのような影響を与えるかの意識。
- ・(9) 文化的規範と前提とが判断の問題にどのような影響を与えるかについての理解。
- ・(10) 文学言語の複雑な性格の把握と、文学言語をよりよく理解するための関連研究に対する意識。

汎用的な修了時の技能

3.3 英語・英文学の修了学生は、学科固有の分析スキルを一般的問題と関連づけ、個々の問題とそのスキルの広範な応用によって理解できるようになる。英語・英文学の修了学生が獲得すべき、重要な応用可能な認識スキル、そのお陰で彼らが雇用主に対して魅力的になれるスキルは、

- ・(1) 高度な、リテラシーとコミュニケーションスキル、およびこれらのスキルを、適切なコンテキストの中で応用できる能力。そこには、書き言葉や口頭による持続した説得力ある議論を、力強く一貫して提示できる能力が含まれる。
- ・(2) 様々な形態の言説を分析し、批判的に検証できる力量。
- ・(3) 明晰な表現と適切なスタイルを達成するための、下書きや書き直しのプロセスに携われる能力。
- ・(4) この分野の批判的方法を、様々な現実の環境に援用し、応用できる力量。
- ・(5) 学科固有の解釈スキルの利用を含めて、かなりの量の多様な種類の複雑な情報を、構造的かつ体系的に獲得できる能力。
- ・(6) エッセイや、プレゼンテーション、その他の文章作成やプロジェクトを企画し、処理できる力。
- ・(7) 自分自身の思考や判断を、批判的実践や創造的実践をとおして示すことができる力量。
- ・(8) 批判的な論証や分析の技量。
- ・(9) 目的と結果についての理解を含んだ上で、複雑な諸概念を、オープンエンドなやり方で把握し、展開できる能力。
- ・(10) 様々な観念や情報の提示および解決法の集団的な探求を通じて、他人と協同し、関係を持つことができる能力。
- ・(11) 様々な理論的立場を理解し、問いかけ、応用する能力と、他の視点の重要性を校了するこ

とが出来る能力。

- ・(12) 情報や議論を、批判的、かつ自己省察的に扱える能力。
- ・(13) 自分自身で批判的に素材を収集し、ふるい分け、組み立て、その意義を評価する能力を含めた、リサーチの技能。
- ・(14) 広い意味での情報技術(IT)の技能と、電子的資源(ハイパーテキスト、電子会議、電子出版、ブログ、ウィキ)にアクセスし、それによって作業し、評価する能力。
- ・(15) 企画を立て、結果を効果的に提示する能力によって示されるような、時間管理と組み立ての技能。

4. 教育、学習、評価

4.1 英語・英文学のプログラムは、用意されるカリキュラムと学生の学習体験を通じ、一貫して上達する発展の原理を、明示しなければならない。重要なのは、学生たちには最初に、学習プログラムのどこに強みがあり、力点が置かれるかを十分に知らせ、評価基準がプログラムの成果と明確にリンクしていることである。

4.2 英語・英文学を教えるためには数多くの適切なフォーマットがある。その中には、講義、ゼミ、ワークショップ、チュートリアル、個人指導、および様々な種類の、指導はするけれどももっぱら独力による学習がある。印刷された資料集や視聴覚教材、コーパス、情報・コミュニケーション技術(information and communications technology)とインターネットを含む一定範囲の電子メディアを利用する作業もあるが、すべての英語・英文学コースは、伝統的な印刷による——一次資料にせよ二次資料にせよ——書かれたテキストへのアクセスを土台としている。英語・英文学および同族科目は仮想学習環境を大胆に利用する。作業の様々な局面において、学生は、情報検索、理解と分析、問題解決、独創的テキストの創出の技能を発展させる。したがって、評価方法は、諸観念や科目に関する知識の、正確で、明晰で、効果的で、一貫したコミュニケーションを評価すると共に、その促進を目的としなければならない。

4.3 こうした材料の独力での研究と、諸観念のコミュニケーションや議論との相互作用が英語・英文学の教育には基本である。英語・英文学のプログラムにおける教育の配置(arrangement)は、直接の指導(instruction)(あるいは他の形式による情報の用意)と、積極的な吸収、質問、ディベートの機会とのバランスをとらなければならない。書かれたもの(writing)についての焦点を絞った議論がこの学科における学習の核心にある。学生が対話に参加し、他者と共に結論を展開したり、交渉したりすることが大事であり、それが、学科固有の技能と応用可能な技能の獲得におけるキーとなる要素である。

4.4 上記の技能を発展させて示し、情報を与えた上での文章によるディベートに参加し、様々な考えを持続した議論の形で提示するために、英語・英文学の学生は情報を与えられた上での文章による分析に参加し、様々な考えを持続した議論の形で提示することが求められる。

4.5 英語・英文学のプログラムの多くは、様々な種類の「単位」化された formats of modular schemes の中で機能し、そのそれぞれの「単位」は明確に定義された目的を明記する。全体の構成がいかなるものであれ、個々の要素と、全体としてのコースの目的との関係は、一貫した明確なものでなければならない。

評価

4.6 学生の評価は、学習プロセスと学位取得プログラムの成果に明確にリンクしていなければならないが、その際、評価というものが、学生が何をどう学ぶかに大きな影響を与えることを認識すべきである。評価は学習プロセスの中に含まれ、それを特徴づける(informs)ものである。評価は、累積的に評価するものであると同時に、形成的(formative)で診断的なものでもあり、そのプロセスは学生に建設的なフィードバックをもたらすものでなければならない。学生たちには独創的な思考と発想を追求する機会を与え、受け取った意見を問い直すよう促すべきである。評価の基準は適切な

プログラム、単位、モジュールとの関連で明記されるべきであり、たとえば、口頭の評価や作業関連のレポートに関する特定の偏差は明示すべきである。

4.7 選択や精神の自立を重んじるプログラムの目的と同様、多様な材料や方法[の利用]からすると、英語・英文学の学生は様々な評価形式を経験することが望ましいと思われる。各プログラムは、評価方法の全体的な原理を明示し、明確にすべきであるし、診断的評価と最終的評価の関係を明らかにし、採用される様々な方法の中で、評価が学生に対する要求や、適用される判断基準と一貫するように保証しなければならない。

4.8 英語・英文学と同族学科は、多様な形式の評価の利用に努める。エッセイのほかに、以下の形式の評価が含まれるだろう

- ・(1) 公式の様々な種類と時間による閲覧禁止の？(unseen)試験。
- ・(2) 「持ち出し」の試験。
- ・(3) コースワーク(短いエッセイや長いエッセイの課題と審査を含む)
- ・(4) プロジェクト・ワーク(共同作業となるかもしれない)
- ・(5) 論文(かなりの学問調査による証拠を要するかもしれない)
- ・(6) 口頭[発表]による評価(公式の発表、会合の運営、ゼミ活動の評価などを含む)
- ・(7) external placement or work-based reports
- ・(8) 特定技能の上達を目指す課題(ICT: 情報およびコミュニケーション技術や書誌学の訓練を含む)
- ・(9) 創作や、批評文や、テキストの書き換えなどのポートフォリオ。それには省察的日記、エッセイ計画、注釈付きの書誌、電子素材を含む創作資源(created resources)が含まれるかもしれない。

4.9 全体として、英語・英文学の評価は、下記の領域のすぐれたレベル(第5セクションを参照)の達成に報いる。

- ・(1) 学科に関する知識の幅と深さ(関連するコンテキストについての知識を含む)、テキスト分析能力表示、あるいはまた、情報に基づき、言語学的、文体的選択について評価し、省察を加える能力。
- ・(2) 論証的(discursive)分析と論議の統御。そこには他の論議の筋道やコンテキスト化の筋道に対する意識が含まれる。
- ・(3) 説得力に富む展開や証拠の価値評価を示すレトリックの戦略。
- ・(4) 思案の流ちょうで効果的なコミュニケーション、および洗練された文章作成技能。
- ・(5) 解釈や文章作成の実践における、精神の自主性と取り組みの獨創性。
- ・(6) 批判的洞察。
- ・(7) 学問的ディベートへの情報に基づく関与。

5 標準とすべき基準

閾値となる標準

5.1 これは学位取得学生が到達すべき最低条件である

5.2 英語・英文学を学位取得の重要な一要素として学んだ修了生は、上記第三節に示された範囲のカリキュラムで定められたような、学科についての知識を示すことができるものとする。

5.3 その知識には、英語・英文学において提示される様々な考えや価値に対する意識[awareness 認識?]と、英語・英文学に対する様々な批判的、創造的な取り組みがそれ自体で知識を産み出すことに対する意識が含まれることとする。

5.4 英語・英文学 の修了生はテキスト分析と批判的議論の能力を示すことができ、英語で書かれた文章の読解や口頭での表現の力を示すことができることとする。修了生は言語の情緒的力に対する認識と、自分が書いたものに自己批判的に向き合えることを示すことができるものとする。

5.5 修了生は自分の考えとは違った考えについて考察し、テキストの精読において一定の自主的で批判的な判断が下せるものとする。

5.6 修了生は、関連情報の収集や組織化された調査をもとに、自分で設定した問いと課題をとおして研究を進め、立証された(sustained)作品、あるいは複数の作品に結実させることができることとする。

典型となる標準

5.7 これは、一番大きな集団となる結果を出す、典型的学生が到達するレベルである。

5.8 英語・英文学を学位取得のための重要な一要素として学んだ典型的学位取得者は、上記第3章で示された範囲のカリキュラムに定められた学科についての広範な知識を示すことができ、その中心問題の概念的把握を発展させる能力を示すことができるものとする。

5.9 彼らの知識には 英語・英文学によって表される様々な考えや価値を解釈する能力が含まれることになる。彼らは、これら様々な取り組みが知識を産み出す道筋を認識し、明示することができるものとする。

5.10 彼らはテキスト分析と流暢な批判的論議の力と共に、自信に満ちた分析技能を示すことができるものとする。彼らは広範で正確な語彙と共に、効果的に英語を書く力を上達させるものとする。

5.11 彼らは歴史的、文化的差異や、言語が意味を形成する情緒的力について、情報に基づく認識を示すことができるものとする。

5.12 彼らは、彼らの考えとは違った見解との批判的ディベートに参加し、思考の自主性を示し、自分および他人の仕事に対して一定の批判的判断を下すことができるものとする。

5.13 彼らは、言語的な細部、構造、形式の重要性と、コミュニケーションおよび解釈のプロセスにおける読者の役割の重要性に留意しながら、注意と正確さをもってテキスト読解、あるいはまた生産を行うことができる。

5.14 彼らは、関連情報や材料の収集と組織化された調査をもとに、自分で設定した問いと課題をとおして研究を進め、創造と議論と分析の力に充ちた一貫した(sustained)作品、あるいは複数の作品に結実させることができる。

5.15 彼らは発表の学問的標準や、正確で、明晰で、効果的な文章を書く学問的標準を達成することができる。

○ 外国語（諸言語：languages）とそれに関連する学習(2007、2002 年度版の改訂)

前書き

……外国語とそれに関連する学習(以後、「外国語」とする)の重要性は、[個別の]国のレベルにおいても国際的なレベルにおいても、広く認められてきた。外国語はイギリス(UK)とヨーロッパ連合(EU)における数多くの審査やレポートの主題であった。この結果、個人にとっても社会にとっても、外国語の経済価値に対する意識が、広範に高まった。外国語を使用できる能力は、いかなる定義によっても、有効な能力であり、雇用主からも高く評価されている。外国語の学位取得者は、人文科学の全ての学位取得者の中で、最も高い就職率を誇っている。実際、外国語の学位取得者の就職率が劣るのは、歯科とか獣医学とかいうもっと狭く職業に絞った学科に対してだけである。

外国語はそれらが使用されている場所の文化やアイデンティティを表す上で重要な役割を果たしている。外国語は諸外国の文化的資源や生き方の複雑なパターンに対して特権的な理解方法を与えてくれるし、国々間の関係や相互理解を促進する上で重要な役割をもっている。……

1 序論

1.1 現在では多くの学位取得プログラムは、外国の言語や文化を通り抜ける[navigate に対応する]能力が 国際間のコミュニケーションの重要な一面であり、ますます相互依存的になっている世界での重要な資産であることを認識している。外国語は価値ある報いの多い研学習対象を提供し、修了生のキャリアと雇用機会を大幅に増やす。したがって、外国語の単一学位に加えて、学生には、外国語のユニットが、副専攻、あるいは選択科目として広範に用意されている。この科目別基準提示が焦点を当てるのは、最初の外国語の学位である。そのような学位には標準や唯一のパターンというものはない。単一学位取得のプログラムとして提供されているものも多いが、これはもはや優勢なモデルではない。イギリスの高等教育では、外国語はますます、共同学位や複合学位を基礎とし、他の外国語あるいは学問分野と結びつけて、また特に他分野を排除してではないけれども、人文科学や社会科学の分野と結びつけて学習されている。

1.5 審査グループは、諸言語[研究、学習]に関する基準関連の重要な提案[initiatives]、特に、「言語学習のためのヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)、「イギリス国内言語基準」(National Language Standards: 現在は The UK Occupational Language Standards: イギリス職業対応言語基準)、「イギリスにおける言語教育のための国内認知基準」(National Recognition Scheme for Languages in England: Language Ladder)を念頭に置いてきた。このグループはまた、ヨーロッパ高等教育圏のための収斂枠設立を目指しており、現在の Diploma Supplement [参加国共通の高等教育機関修了証]にも反映されている、「ヨーロッパの高等教育機関における言語教育のためのボローニャ・プロセス」(Bologna Process for Higher Education Language Teaching in Europe)を念頭に置いている。これは、2010 年までにヨーロッパを世界で最も競争力に富み最もダイナミックな知識を基盤とした(knowledge-based)経済圏にしようとするEUのリスボン・アジェンダの基礎的構成要素である。この基準提示は、これらの参照枠を、イギリスの高等教育に適切なものとして適用する試みである。

2 定義原則

2.1 学部教育課程における言語学習は一つあるいは二つの外国語能力の獲得と上達、および、対象とする言語という媒体をとおして、最も広い意味における他国の文化(複数の文化)の分析と理解に関わるものである。これは、全ての指示が必然的に対象言語でなされるという意味ではない。この学科目の多文化にまたがる(intercultural)性格はその重要な特徴の一つを表し、この学問分野に内在するものである。この科目の多文化にまたがる性格には、自分自身の文化の様々な側面についての省察を学ぶことも含まれる。

2.2 この学科の範囲はきわめて広く、潜在的には過去と現在の全ての言語を含むけれども、全てのプログラムに共通する言語学習の二つの主要要素を特定[identify]することができる。第一の要素は、対象言語の能力獲得に焦点を当てることであり、そのためには、広範な知識と理解と、科目固有の性格と汎用的性格の技能とが必要である。第二の要素は学習言語に結びつく文化・社会の諸相の研究であり、その場合の研究の性格と範囲はプログラムの目的と対象に応じて変化するだろう。そのような研究は学習される外国語の文化に固有のものかもしれないが、その文化の理解を実体化するために他の学問分野を利用することもある。

2.3 この分野の基礎になるのは、言語学習には次の四つの相補的な側面があるという認識である。言語は同時に、

・(1) 以下(2.5, 2.6)で対象言語の利用として述べられているとおり、理解、表現、コミュニケーションの媒体である。

- ・(2) 以下(2.7)で知的な自覚、理解、能力として述べられているとおり、他の社会と文化を知るための媒体である。
- ・(3) 以下(2.8)で言語に関する明確な知識と述べられているとおり、それ自体が学習の対象である。
- ・(4) 以下(2.9)で当該言語が使用されている文化、共同体、社会に関する知識と述べられているとおり、様々な知識の体系(bodies)や方法論的手段を含む、関連するテーマ研究への入り口である。

2.4 事実上、全ての外国語学習プログラムは、上記四つの側面を統合しようとするものである。

2.10 このような知識と理解の多くは、対象言語を使用する社会の文学やそのほかの文化的生産物に実体化されている。このような領域で作業する学生たちは、言説、テキスト、イメージ、イベントについての多様な批判的視点からの分析を含む、他分野と共有する方法論的取り組みと技術を採用する。他の形態の知識は、他の社会の歴史、地理、制度、社会实践、経済生活に実体化されている。

2.13 言語技能の上級レベルへの上達は、該当言語が話されている海外の国への一定期間の滞在によって大いに促進される。そのような滞在には、状況によって、対象言語が話される共同体での一定期間の学習、交換留学、仕事上の配置や助手職が含まれるだろう。海外滞在の期間はそれぞれのプログラムで異なっており、仮想的な移動実現のため、仮想学習環境や他のオンラインの資源を広範に利用するプログラムもある。海外滞在の期間は、言語や社会・文化の研究においては、知識と理解と技能の上達や増進に、重要で、しばしばは本質的な貢献を果たす。

3 外国語とそれに関連する学習の性格と範囲

3.4 この基準提示は、外国語による学士号取得者に期待される知識と技能を扱うものであるが、多くの学部学生が行う外国語学習は、他の学問分野の名前が付いているプログラムの内外や、しばしばは大学全体にわたる外国語プログラムの枠組みの中で、行われることを認識している。そのような学生の大多数は、外国語の専門家ではないし、学習言語における、第7節で定められるような、卒業時の標準レベルの能力を目指すわけではない。このような学生の大部分にとっては、「言語教育のためのヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment and use of the European Language Portfolio)が有益で適切だろう。けれども、これらの専門家ではない学生たちの言語学習経験は、専門の学生たちの経験と多くの共通点をもつ。特に、受信と発信の技能のバランスや、信頼すべき(authentic)資料に触れること、教育技術の役割という点において、5.4 項はこれらの学生たちに適用される。同様に、最終学年時と同等レベルでの言語学習を求める専門外の学生たちにとっては、基準提示の、言語技能と達成の標準とレベルに関する部分(7.11 項)も適切な関連項目だろう。

4 学科で得られる知識と理解

知的意識、理解と能力

4.4 外国語の学生の間で促進されるキーとなる知識と理解のあり方は、学生自身の言語や社会から生まれる世界観を、彼らが学んだ言語や社会から生まれる世界観と比較できる能力である。

6 教育、学習、評価

海外滞在期間

7 基準標準

7.1 イギリス国内においては、多様な学位取得プログラムの中で、様々なレベルで幅広い外国語を学習することができる。以下に述べる達成度の標準が原則として適用されることを想定している学位取得プログラムは、その中で一つあるいはそれ以上の言語の学習が

- ・(1) 学習量全体の少なくとも三分の一をなしているもの

- ・(2) プログラムの全学年をとおして連続して行われるもの
- ・(3) 優等(award) (ただし、特に言語の名前が付されていないかもしれない) の名前で認められているものである。

達成度のレベル分け

7.10 それぞれの特定のプログラムで決められているとおり、外国語の学士取得者は閾値レベルおよび典型レベルで、以下のことを達成すると期待される。

閾値標準

対象言語の使用

7.11 学生は少なくとも「ヨーロッパ言語共通参照枠組」のC1レベル(効果的運用能力)を達成し、以下のことができるようにならなければならない

- ・(1) 対象言語によって、対象言語の話し手と効果的コミュニケーションを達成すること。
- ・(2) 様々な目的のため、対象言語によって、書かれたり、話されたりする幅広い材料を利用すること。
- ・(3) 広範な専門的コンテキストで、言語技能を利用すること。

テーマ学習に関する知識

7.14 学生は以下の事項についての知識と理解を示すことができないと認められない

- ・(1) 対象言語を使用する社会の、文学、文化、言語的コンテキスト、歴史、政治、地理の諸相、および社会・経済の構造
- ・(2) 対象言語で書かれたテキストや他の文化的生産物の学習を通じて獲得された対象言語を使用する国の文化や社会

典型標準

対象言語の使用

7.16 学生は「ヨーロッパ言語共通参照枠組」のC2レベルを達成し、以下のことができないと認められない

- ・(1) 対象言語の能力ある話し手と、対象言語によって、高度の文法的正確さを維持しながら、流暢かつ適切にコミュニケーションがとれること。
- ・(2) 対象言語で書かれたり話されたりする広範な材料を、様々な目的のために利用し、適切なものとしてコンテキストに位置づけること。
- ・(3) 自分の言語技能を、専門的コンテキストに、効果的かつ適切に応用すること。

○ 言語学(2007)

1 序論

1.2 言語学においては実に多様なものが提供される。大学・短大入試サービス(UCAS)のウェブサイトによれば、2001年時点で、69の高等教育機関で、学士号取得のための一部として言語学を含むコースが645あった。・・

2 定義の原則

2.1 言語学が扱うのは、話されたり、書かれたり、記号であったりする、あらゆる形態の言語である。言語は人間のみにも備わる特質と思われるので、言語とはいかなるものであるか、人類はいかにして言語を獲得したか、人間は言語をどのように利用するかという問題が、2000年以上にわたって探求されてきた。言語への問いかけはつねに、人間の認知と行動についての根元的な問題を提起してきた。おそらく言語学の基本的な洞察は、まさに、言語と言語行動が高度に構造化されているということと、現代言語学の指導原理は、こうした構造の性質は広範な理論的、経験的方法論をとおした体系的な研究によって解明されるということである。

2.2 今日の言語学が扱うのは、発話の際の音波の物理的特性から、会話における話者の他人に対する意図や、会話が埋め込まれている社会的コンテキストにいたるまでの、言語の多くの異なった局面である。言語学の多様な下位区分が扱うのは、諸言語がいかに構造化されているか、諸言語は何を共通にもっているか、諸言語の間の際の範囲と限界はいかなるものであるか、諸言語はいかにして獲得され使用されるのか、またいかに変化するのか、といったことである。この意味での言語の特性に関する研究、このような探求領域に対する理論的モデルを構築すること、これらすべては言語学の標題のもとにある。

2.3 言語は人間活動のほとんどあらゆる領域に浸透しているので、言語学的分析の応用範囲はきわめて広く、言語が実際に問題となるほとんど全ての領域を含んでいる。そうした領域には、決してそれだけに限られるわけではないが、以下の領域が含まれる。

- ・(1) 特定言語の教育と学習
- ・(2) 新しいテクノロジーにおける言語の問題
- ・(3) 書記体系(writing system)、辞書、諸言語のための標準化された技術的フォーマット(technical formats)の発展。
- ・(4) 諸言語間の翻訳の研究。
- ・(5) 言語計画や言語政策を含む、グローバル化する多言語社会と多文化社会における言語問題。
- ・(6) 失語症や、話し聞く場合の失調のような、言語的困難を抱える人々の症例の研究。
- ・(7) 異なった社会・文化・民族的背景をもつグループ間のコミュニケーションの研究。言語意識と言語イデオロギー、研究領域としての危機に瀕している言語。
- ・(9) 法律上のコンテキストにおける言語の使用と誤用。

2.5 人間(human beings)の言語使用には広範な認知的、社会的、相互的(interactional)な技能と能力が含まれるので、言語研究に利用する知的道具も広範な分野からのものになる。つまり言語に関しては、言語の教育のような実際的関心からの見方と共に、形式的、社会学的、心理学的な視点からの広範な見方があることになる。それゆえ、言語学の多くは、取り組む問題と、利用する方法論の双方において、学際的なものである。これらの方法は、伝統的な言語構造の問題に取り組むべく開発された分析様式を補完して、多くの言語学の豊かな学際的性格につながっている。言語学における単一の学位取得のためのプログラムは、次節に挙げられるものの多くの部分を含むことになる。共同学位プログラムは、一般的に、そのプログラム自体の教育研究上の強みと学生の必要に照らして、それらのうちの様々な要素を選択、改編することになる。単一学位のプログラムも、共同学位のプログラムも、共に、少なくとも学生に言語学の広範な問題を紹介する、基礎的な導入コースを設けるべきである。

3 言語学の性格と範囲

学科で得られる知識と理解

3.1 第2節から明らかなように、言語は広範な視点から学ぶことができる。言語によるコミュニケーション行為は、それぞれの対話相手による広範な技能の利用(deployment)を含み、その多くは意識的に内省されることはない。伝統的には、特殊な調査対象としていくつかの分析領域が抽出され、それが、特定の言語特性や、それらの特性が話者や時間や空間によってどのように変化するかについて調査する。

3.4 以下 phonetics, (3.5)phonology, (3.6)morphology, (3.7)syntax, (3.8)semantics, (3.9)pragmatics, (3.10)discourse, (3.11)lexicon, (3.12)sociolinguistics, (3.13)historical linguistics, (3.14)typological linguistics, (3.15)psycholinguistics の各項についての説明。

3.20 いくつかの領域においては、言語学の分野そのものが研究対象となる。

4 技能

学科固有の知識、理解、技能

4.1 示したように、言語学はきわめて広い基礎をもち、他の多くの分野と相互に作用する。異なったプログラムには、第3節に挙げた話題の様々な組み合わせが現れる。・・加えて、言語学の優等の成績で言語学の学位を取得したものは、一定の範囲において学科固有のほかの技能と知識を獲得することになる。関連する話題は以下のとおりである

- ・(1) 理論の性格と何が説明を構成するか
- ・(2) 中心となる分析概念と 第3節に挙げられた話題に適切な質問方法
- ・(3) 言語学的現象に対する体系的方法の必要と、理論がいかに理解の組織化を助けるか
- ・

5 教育、学習、評価

6 基準の標準

○ 古典と古代史（ビザンツ研究と現代ギリシア語を含む）（2007, 2000 年版の改訂）

1 序論

2 古典と古代史(ビザンツ研究と現代ギリシア語を含む)

学科領域の案内

歴史的意義

2.1 古典世界は、初期キリスト教の拡大、ユダヤ主義の発展、近東、北アフリカ、スペインにおける中世イスラム文化の輪郭、またビザンティウム、帝政ロシア、および東方正教会世界の輪郭を形成する上で、多大な貢献をなした。古典世界の言語、文学、歴史、哲学、法律、科学と医学、美術と建築は、特にルネサンス以降、西欧では絶えず研究されてきたし、現在もなお、世界中の大学の学習、教育、研究の対象となっている。それは思想家や創造的芸術家たちの想像力を刺激し続けている。広範な歴史的意義のため、この学科領域は多文化社会にあって、特に魅力的で重要な貢献をなし得る。

現代の教育に対する影響

2.2 古代ギリシア・ローマの文化的産物への関与が、広範にわたる他の芸術や人文科学の諸課題およびそれらの発展を形成してきた。古典研究はそれ自身が、長い期間にわたる西欧およびビザンツ文明の理解を解明する研究課題である。古代ギリシア・ローマは、教育システムがいかなるものであるべきかについての我々の概念を形成する上で、多大の貢献をなしてきた。また、古代ギリシア・ローマは非職業的鍛錬の元の範例となっているので、優等の学位取得者の一般的特性に関する現代社会の期待も、長い間古典[語]教育と結びついてきた期待を反映しているほどである。

開放性

2.8 この学科領域の境界に様々な分野が浸透してくるということは、この学科領域の強みである。例えば人類学や考古学、美術史、演劇、エジプト学、英語・英文学、歴史、科学史、ユダヤ主義と近東学、言語学、現代ギリシア語以外の近代諸語、哲学及び宗教学を含む、他の学問分野や領域との創造的な相互作用がある。

学生の背景と位置づけ

教育的背景

2.14 この学科領域で資格を取ろうと努める学生たちの教育的背景は実に様々である。大多数は依然として新卒業生たちである。古典研究、古代史、ビザンツ研究、現代ギリシア語などのコースは、これまでどのような学科目を学んできたにせよ、有能は学生に対して開かれている。……新卒業生とともに、社会人学生(mature students)の数も増加しつつある。いくつかの教育機関ではこの

学科領域のプログラムを受講している学生の中で社会人学生が重要な割合を占めつつあるし、オープンユニヴァーシティでは学生の全体を占めている。……

○ コミュニケーション、メディア、映画、文化研究（2008, 2002年版の改訂）

序論

1.1 人間の社会生活は、様々なコミュニケーションの絶えざる発展と多様な利用、および共有されたり競合したりする世界についての認識に依存しており、コミュニケーションと文化の体系的研究、多様なチャンネルをとおしてコミュニケーションと文化が仲介されることの体系的研究が必要となる。文化産業、コミュニケーション産業がますます中心的な役割を果たし、また様々な社会的・政治的組織と創造的表現とが、あらゆる点でメディアの様々な形式と実践の影響を受けるような、地域的、国家的、地球的秩序の中では、そのような研究がさらに一層重要になってくる。コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の学位取得プログラムは、人間の相互作用における象徴構造(symbolic structures)の役割の理解に対する一般の要求と、現代社会における象徴構造の変化する性格と役割に取り組む際に必要な特定の課題によって提起される、チャレンジに込めるものである。

1.2 このようなプログラムは、芸術や人文科学や社会科学のいくつもの分野にその源をもつ。これらのプログラムはまた、ますます、文化産業や映画産業、コミュニケーション産業での創造的かつ専門的実践の主要な領域で開発された概念や能力や知識と、デザイン、ビジネス、コンピューター技術や先進技術から得られた洞察とを利用するようになっている。このように発展してきた研究領域が今度は、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の領域への明確で独創的な方法をつくり出し、研究と実践の新たに出現しつつある対象の探求への学際的で多分野にまたがる方法をとおして、旧来の学問分野の限界を探り、部分的にはその境界を溶かしつつある。

1.3 こうした作業の多くには、これらの領域の複雑さをマッピングできる概念と理論、つまり、当然のことながら必然的に論議の的となる概念と理論の開発と吟味とが含まれている。それには以下のものが含まれる

- ・(1) いかにして、文化組織とメディア組織が、一般的な政治・経済のプロセスと交差するか(「政治経済」(political economy)の問題)。
- ・(2) いかにして世界の様々な説明がつくり出され、それらの説明が象徴的に個人と社会とを仲介するか(「表象」(representation)の問題)。
- ・(3) いかにして創造的で文化的な価値が体験され、理解されるか(「美学」(aesthetics)の問題)。
- ・(4) いかにして社会的相互作用が、意味の循環と表象のシステムをとおして機能するか(「言説」(discourse)の問題)。
- ・(5) いかにして創造的な文化の産物が発想され、実現され、流通させられるのか、またそれらのプロセスがどの程度まで変化し、今も変化し続けているのか(「生産」と「流通」の問題)。
- ・(6) いかにして人々は文化的テキストや文化的実践を占有し、利用するのか(「消費」の問題)。
- ・(7) いかにして、自己の認識と世界の認識が、そのようなテキストや実践との関連のもとで形成されるのか(「アイデンティティ」の問題)。
- ・(8) 様々な意味の体系相互の関係と、社会・政治的権力と不平等との関係(「イデオロギー」の問題)。

1.4 コミュニケーション、メディア、映画、文化研究はまた、これらのものが現代社会の社会的、経済的、政治的組織の中で果たしているいよいよ重要性を増す役割についての新しい理解と共に、文化形式の多様性についてのより広範な理解を促進してきた。……最後に、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究は、受け継いできた文化伝統や正典(canons)を再評価し、いかにしてメディア、コミュニケーション、文化的活動やプロセスが日常の社会生活と心理生活(psychological life)の組織化にとって、またいくつものグループのアイデンティティ構築にとって、中心的であるかを究明してきた。

1.6 基準審査グループはまた、それ自体が学際的グループとして、グループの仕事と、美術とデザイン、ビジネスと経営の研究、ダンス・演劇・パフォーマンス研究、英語・英文学、美術史、建築とデザイン、言語学、音楽、社会学などの領域の同僚の仕事との間の、学問分野の重なりを意識してきた。われわれは、いくつかの学位取得プログラムは、プログラムの明細を作成する際、適切であれば、こうした他の学科グループの基準提示を利用することを望むのではないかと期待する。第一に専門的実践領域に焦点を当てるいくつかのプログラムは、専門機関によって定められた標準を利用したいと望むかもしれない。

1.7 この提示が焦点を当てるのは、単一学位取得プログラムである。けれどもわれわれは、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究はまた、複合学位や共同学位プログラムにも見受けられることを認識している。これらの領域での単一学位取得プログラムが様々なやり方で以下に挙げる提示からいくつかの要素を結びつけるのと同じように、われわれは、複合学位や共同学位取得プログラムも以下の提示から適切なものを抜き出してくれるものと期待する。

2 定義の原則

2.1 研究領域としてのコミュニケーション、メディア、映画、文化研究の特徴は、経済的、政治的活動組織の中でのアイデンティティの感覚と同様、日常の社会生活と心理生活の形成や、大衆文化の形成、新しい表現形式の創造における中心的な力として、また一定の専門的実践の基礎として、文化活動とコミュニケーション活動に焦点を当てるところにある。

2.2 これらの研究領域における学位取得プログラムは、強調点の置き方の多様性によって特徴づけられる。プログラムの標題には、例えば、放送、コミュニケーション研究、文化研究、映画(film or screen)研究、ジャーナリズム、メディア制作、メディア研究、デジタルあるいはインタラクティブ・メディア、大衆文化、広報(public relations)、出版などが含まれるだろう。加えて、いくつかの学位取得プログラムでは、

- ・(1) 文化あるいはまたコミュニケーションとメディア全般の領域にわたるものもあれば、映画、写真、ジャーナリズムのような特定の実践に焦点を当てるものもある。
- ・(2) コミュニケーション、メディア、文化関連技術の実践的あるいは技術的側面に特に注意を向けるものもあれば、それらの経済的あるいは商業的応用、産業や経営における構造と方法、社会的利用法、あるいはまた早朝的、審美的、情動的可能性に焦点を当てるものもある。
- ・(3) 歴史についての重要な要素を含むものもあれば、現在の発達(development)を強調するものもある。既存のメディアや文化活動分野に集中するものもあれば、新しく現れつつある形態のメディア、文化、コミュニケーションに特に注意を向けるものもある。
- ・(4) 最も基本的な様式の人間のコミュニケーション(話されたり書かれたりする言語、視聴覚によるコミュニケーション、対面式の人間観のコミュニケーション、グループ・ダイナミクス)。いくつかのものは、特定のメディア、文化的審美的体系(たとえば、印刷メディア、映画、テレビ、ラジオ、ポピュラー音楽、新しい形式のデジタルおよびコンピューターによるコミュニケーション)に焦点を当てる。またいくつかのものは、様々な形式の物質文化や日常の文化活動(たとえば、ポピュラーな文化形式や活動、公共空間と私的空間の組織化、画廊や博物館や劇場といった文化施設、正典的な文化形式とポピュラーな文化形式との関係)を調査研究する。
- ・(5) 第一に専門的実践とそれに関連する創造的なビジネスや経営、知的あるいはまた技術的技能に焦点を当てるものもあれば、メディアや文化の生産を直接にはまったく経験させないもの、実践の経験を批判的内省の第一義的な手段としては提供しないものもある。

2.3 それにもかかわらず、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究における学位取得プログラムは、次のような学生、つまり、現代社会におけるメディア、文化、コミュニケーションの理解と、彼ら自身のやり方によるメディア、コミュニケーション、表現の実践への、情報に基づいた批判的で創造的な取り組みができる学生をつくり出すという共通の目的をもっている。

これらのプログラムは、学生たちが文化産業やコミュニケーション産業がますます中心的な役割を

果たしつつある社会での雇用(自営業を含めて)の機会に対応できるよう努めるものであるが、雇用機会を増やすためには、学生の想像的、知的、分析的技能と調査技能が必要だということを強調するものである。

2.4 学生の学問的および個人的発展を促進するため、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究におけるプログラムは、個人作業やグループ作業、批判的な生産作業の際の、批判的で創造的な自主性、柔軟性、聴衆に対する敏感さ、自己省察を発展させることを強調する様々な教育法[の提示]に努めている。

3 コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の性格と範囲

3.1 その範囲と多様性にもかかわらず、コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の領域は、以下のいくつかの共通する前提によって結びついている

- ・(1) 特に現代の世界では、人々の生活に、多くの形式のマスメディアを含め、実に様々なコミュニケーション(communicative)と文化的・審美的なシステムと実践とが完全に浸透している。
- ・(2) 文化産業、メディア産業、コミュニケーション産業は雇用の重要な領域であり、これらの産業[の要請]に応えられる創造的で専門的な実践のためには、体系的で、批判的で、内省的な教育が必要である。
- ・(3) コミュニケーション産業、文化産業、メディア産業は、人々が個人的にも集団的にも、過去を想像し、現在を定義し、未来のための計画を発展させるための象徴的資源を産み出す上で、重要な役割を果たす。

3.2 コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の学位取得プログラムは、これらの関心やこれらが引き起こす多様な問題のどれを強調するかによって変わってくる。さらにこうした焦点の置き方の違いは、それぞれの領域での作業に資する概念化や実践のための様々な資源とも関連する。それらの資源となるのは

- ・(1) 芸術や人文科学分野で開発された探求のための理論や方法(美学、美術史と美術批評、歴史、法律、文学批評とテキスト批評、哲学、演劇と演技の研究)
- ・(2) 主要な社会科学分野で開発された理論と研究の方法論(人類学、経済学、地理、言語学、政治学、心理学(心理分析を含む)、社会学)
- ・(3) 文化、メディア、コミュニケーション産業の創造的で専門的な実践の主要領域で開発された、概念、能力、知識
- ・(4) 応用された芸術や科学(デザイン、ビジネス、コンピューター技術、先進技術)の理論と研究の方法論

4 学科で得られる知識と理解

5 学科固有の技能

社会的・政治的市民[として]の技能

5.6 修了生は以下の能力を示すことになる

- ・(1) 一般に流布している、コミュニケーション、メディア、文化についてのいくつかの常識的な理解と誤解の批判的評価と、それらの理解と誤解が引き起こす議論と不和(disagreement)の批判的評価。
- ・(2) メディアおよび文化政策がいかに立案され実行されるか、また、それらの政策を形成する上で、市民や文化共同体がどのようにその役割を果たせるかの分析。
- ・(3) 文化に関する議論および異議申し立てをする社会的力(contesting social power)に寄与する上で、共同体や参加型メディア(participatory media forms)が果たしうる役割の分析。
- ・(4) コミュニケーション、メディア、映画、文化研究の領域におけるいくつかの研究対象の論議のある性格についての批判的評価と、下された判断の社会的、政治的含意の批判的評価。
- ・(5) 現代のコミュニケーション、メディア、文化、社会の複雑さと多様性から生じる様々な態度と価値観に対する洞察と、それらの態度と価値観を考察し反応する能力を示すこと。

6 汎用的技能

6.1 この学科領域の修了生はまた、強調点は異なるものの、以下のことができることになる

- ・(1) 自己規律と自発性(self-direction)と内省とを示しながら、柔軟で、創造的な、自立したやりかたで作業する。
- ・(2) 議論を適切に組み立て、さらにその議論を文章や口頭やほかの形式で効果的に表現するため、さまざまな考えや情報を収集し、組織化し、展開する。
- ・(3) 自立した研究を行う際、情報を検索、生成(retrieve and generate)し、その情報源を評価する。
- ・(4) 指導された企画や自発的な企画を組織化し、管理する。
- ・(5) 個人同士の環境で、文章や様々なメディアで効果的にコミュニケーションする。
- ・(6) グループやチームで、時機に応じて効果的に話を聞いたり、意見を述べたり、話をリードしたりする能力を示しながら、生産的に作業する。

7 教育、学習、評価